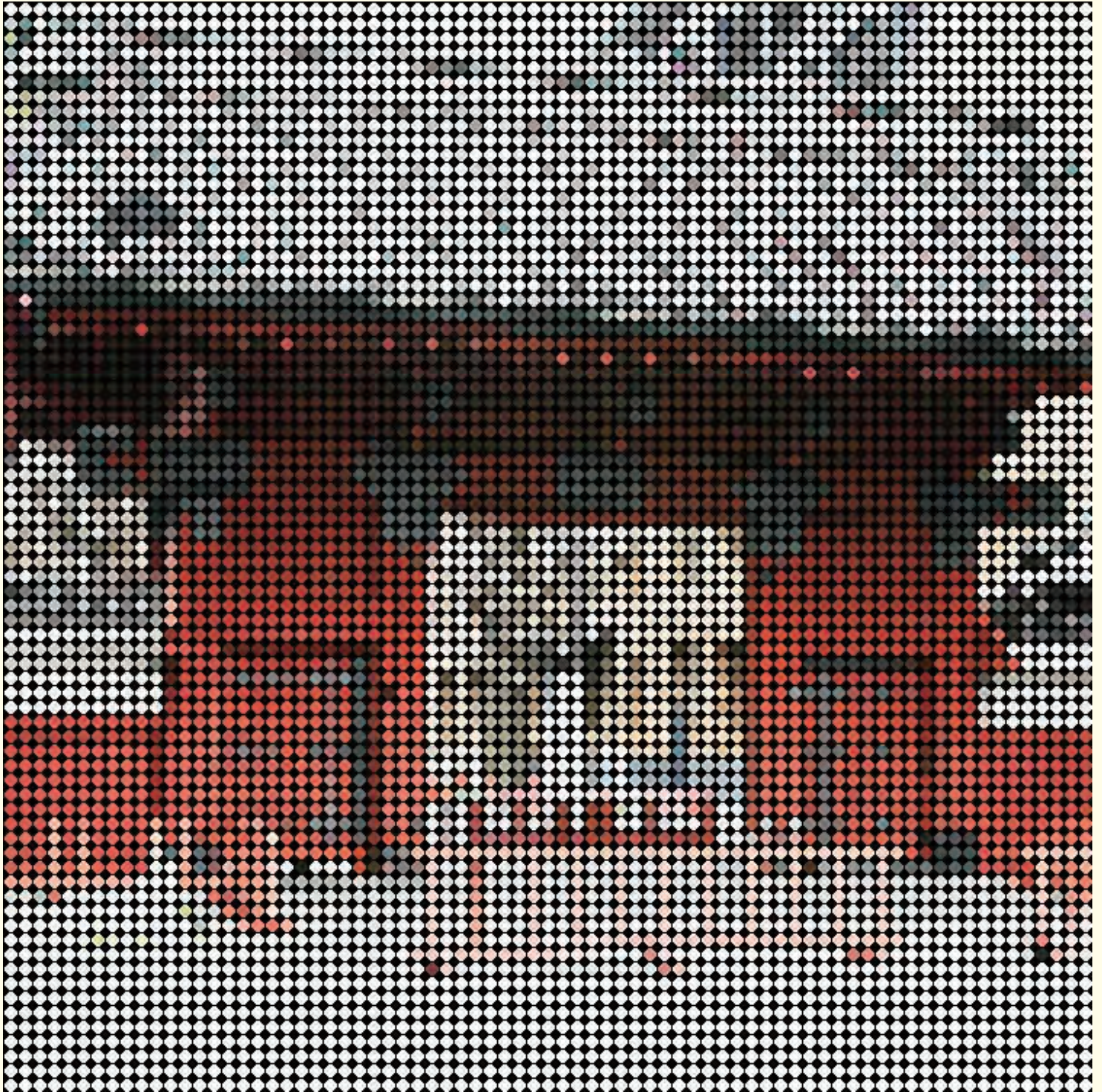


# 学内六報

2017.5.25

no.1496



昔は「赤門」  
じゃなかった!?

→P2



140周年記念赤門展から学ぶ最新研究成果のあれこれ  
**溶姫の赤門、東大の赤門。**

# 溶姫の赤門、東大の赤門。

東京大学創立140周年記念・  
加賀前田家本郷邸開設400周年記念展  
「赤門—溶姫御殿から東京大学へ」  
から学ぶ

教職員なら知っておきたい  
最新研究成果など

標柱の「国宝」を塗り潰していた

1931年の国宝指定を受けて番所前に設置された標柱。法律が変わって重要文化財となったため、昭和の修繕時に「国宝」の文字が朱で塗り潰されました。腐朽のために2002年に撤去されて番所に保管されていましたが、この展示を機に博物館に保管されました。

公文書綴「文部省往復」の1885年の簿冊より（重要文化財）。本部を法文学部内に仮移転し、赤門を東大の正門として定めたことが記されています。「西門」を朱書きで「赤門」と訂正しており、これが「赤門」と公式に表記した初出と位置づけられます。昔は赤門が正門だったことを示す貴重な資料です。

昔の名は「西門」だった



昭和の修繕時に保存された赤門補修部材。「安政四巳年」「本郷元町家主清助店大工権兵衛」の字が朱書きされ、1855年の安政江戸地震と翌年の大風雨で傷んだ門の修復に用いられた補修材であることがわかります。

大工の権兵衛さんが修復していた

赤の塗料は「鉄丹ベンガラ」だった

上の補修材に残存する赤色の塗料を分析した結果、江戸市中大阪市中で生産されていた良質な「鉄丹ベンガラ」という塗料が使用されていたことが判明。酸化鉄を主体とする顔料です。

おすまい ごしゅでん  
御住居から御守殿に改称した

「御住居」と「御守殿」では後者が格上。溶姫御殿は興入の当初「御住居」と呼ばれましたが、夫・斉泰の官位が権中納言に上がったのを機に「御守殿」と呼ばれるようになりました。

昔は医学部の通用門だった

東京医学校（現在の医学部）が本郷に移転した1876年から法・文学部が移ってくるまで、赤門は医学部の通用門として使われました。赤門をデザインした医学部の紋章が当時を偲ばせます。

昔はトラックも出入りしていた

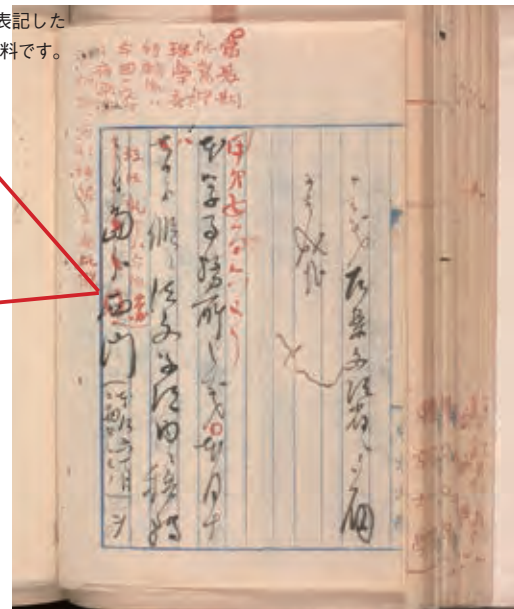
関東大震災後の構内復興工事の折には資材搬入のトラックが出入りしていたことが、当時の「帝国大学新聞」記事から伝わります。国宝に指定された後も自動車は通行していた模様です。

15メートルの引っ越し経験あり

1903年、キャンパス計画の一環で医学部校舎が建設されるのに伴って位置替が行われ、西に約15メートル移動して現在の位置となりました。この移動時には大規模な修繕も行われました。

屋根に雑草がはびこった時代も

関東大震災後修繕の前の写真には、袖塚の瓦が随所で崩落し、番所の屋根に雑草が生い茂る様子が写っています。「東京帝國大學赤門及同門衛所其他修繕工事写真帖」より。



溶姫が作ったアクセがある



溶姫細工物「溶姫様御細工御袂提」。袂提（袂落とし）とは、着物の袂に入れて匂袋や楊枝さしとして使われていた、当時の携帯アクセサリのこと。四季折々の花々や楼閣山水が溶姫の手によって描かれています。

溶姫が描いた絵画もある

将軍家斉の手本をもとに絵を習い、絵心があった溶姫。夫・斉泰の筆文字「大雷天神」（菅原道真の異称）に梅を加えた絵や、真龍院（斉泰の母）の古希を祝う福祿寿図など、見事な作品十数点が前田育徳会に伝えられています。

一帯には赤門が複数あった

江戸時代の絵図を見ると、溶姫御殿の正門である御守殿門のほか、御守殿裏門、前田家本邸の表門（大御門）、富山藩や大聖寺藩の門も赤く塗られているのがわかります。赤く塗った門自体は特別ではなかったようです。

2世紀近くにわたり本学の発展を見守ってきた赤門。本学140周年と加賀前田家本郷邸開設400周年の節目を迎えた今年、常に赤門とともにあった本郷キャンパス史に関する最新の研究成果をまとめた特別展が、総合研究博物館で開催されました。その中から、教職員が知っておきたい項目の一端をお届けします。

御守殿の女中が居住したエリアの便所遺構の堆積土からは、鉛分が多く検出されました。化粧に使う白粉の鉛が体内に吸収された後に排泄されたようです。女中たちが便所で落とすと目される簪や鏡や銭貨なども多数出土しました。

女中らの便所の土から多くの鉛分が検出された



### 瓦紋は徳川の葵→東大の學→前田の梅鉢と変遷した

現在の赤門では、大棟の菊丸瓦に三葉葵、大棟の鬼瓦に「學」、軒丸瓦などに梅鉢、その他には「巴」の紋も見えます。創建時は徳川の三葉葵ばかり→1903年の修繕で鬼瓦や軒丸瓦を東大の「學」に交換→1926年の修繕で軒丸瓦などを前田の梅鉢紋に交換、という具合で変遷したようです。



### 「岩倉」と「濱山」さんが女中陣のリーダーだった

輿入時には49人、天保6年には57人を数えたという溶姫御殿の女中陣を幕末に率いたのは、上臈年寄の岩倉、御年寄の濱山という両上級奥女中。遺構からは、長局で最も間口の広い部屋に居住した濱山の名を墨書した陶磁器が出土しています。

### 本邸と御守殿では出入りの酒屋が違った



福武ホール地点で出土した德利。右から順に「一△」「山加」「高サキ」と酒屋の屋号を示す釘書きが施されています。御守殿では「一△」「山加」が多い一方、本邸で多量に出土する「久〇」はほとんどなく、本邸と別の酒屋が出入りしていたことがわかります。なお、「高サキ」は農学部前で今も営業中の高崎屋さんです。

### 食器に所属を示す字が書かれていた



溶姫がいる御守殿の御膳所は、藩主がいる本邸と共有施設で、廊下で往来できたためか、出土する食器類にはどちらの帰属かを示す墨書や釘書がありました。「スせん」は御守殿膳所の意（ス→守、せん→膳）です。

### 女中は日常的に酒を飲んでいた

公文書管理担当（右筆）を示す「右」、雑用担当を示す「御末」「第三の間」など、詰所の帰属を示す墨書を施した燗德利が多量に出土しました。女中たちの酒宴は各詰所で日常的に行われていたようです。

### 御守殿では囲碁が楽しまれていた模様



福武ホール地点では、御守殿で暮らす人々が使ったと思われる玩具・遊具・ミニチュア類も出土しています。この碁石土製品は、上列が白色、下列は黒色に彩色されていました。

### サザエの貝殻を加工して器にしていた

福武ホール地点で出土した貝類約6000点のうち約8割を占めたのはシジミとハマグリ。巻貝のサザエでは、棘を除去して器としても使ったとおぼしき個体が出土しており、上位階層の人々に配慮した料理の痕跡が認められます。

### 魚ではタイやコイがよく食べられていた

確認された30種類の出土魚類で目立つのはマダイ、コイ、キス属。キスは江戸前の釣りの対象として有名な魚でした。これらの出土形態からは、身を用いた料理を溶姫に、「あら」を用いた料理は女中に供した可能性も推測されます。

### 鳥ではカモやチドリがよく食べられた

6種類79点出土した鳥類遺体は、カモ亜科とガン族で全体の5割近くを占めました。江戸周辺の水辺に生息していたチドリ科やシギ科の出土が比較的多いのも特徴。溶姫と女中たちは国元・江戸の食文化に親しんでいたようです。

### 赤門の影響で赤くなった建物もある

東京医学校本館だった建物は、現在総合研究博物館小石川分館として使われています（重要文化財）。二階の外壁は鮮やかな赤色。1911年に現在の東大病院敷地内から赤門脇に移築された際、赤門との調和を図るために塗られたようです。赤門の影響力の強さが窺えます。

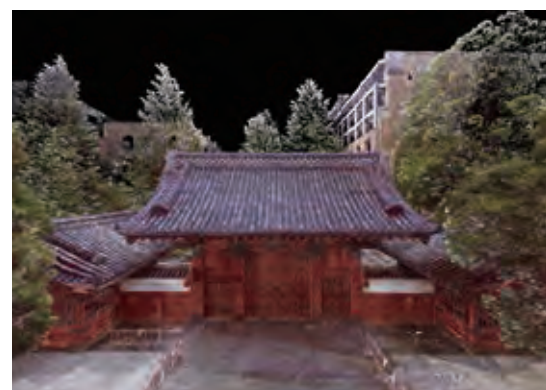
### 永年勤続職員向けの記念絵画にも登場

赤門は大学の記念品になることも。右は勤続20年の職員への記念品として使われたもの（小磯良平作）。笠松紫浪作「本郷赤門の雪」は海外来賓への記念品として使われました。



### 赤門の三次元スキャンデータを生成

十分な日光があって通行人がいない7月の早朝、生産技術研究所・野城研究室が、赤門の三次元スキャンを行いました。今後、このデータの利活用が大いに期待されます。



## 「写された赤門」～写真で見る赤門の変遷～より

東大の象徴となってからこれまで、いろいろな人によって撮影されてきた赤門。埋蔵文化財調査室の成瀬晃司先生(→)は、学内外に残されてきた数多の写真を整理し、変遷ぶりを見事に可視化しました。ここでは、「赤門展」でひと際注目を集めたコーナーの一部を誌上に再現。フォトジェニックなその姿をご堪能ください。



1886～1898年頃



「帝國大學」の看板あり

門前には縁石を有するスロープがあり、門柱には「帝國大學」の表札が見えます。江戸時代の赤門を知る唯一の写真です。『東京帝國大學五十年史』より。

1900年頃



門前のガス灯がなくなる

北側袖塀の位置が変わり、南側袖塀は板塀に。門前は、ガス灯と石敷きスロープがなくなり平らな土敷きになりました。小川一真1900『東京帝國大學』より。

1904年



西に15メートル移動

1903年の移動・修繕後の姿。塀・袖塀が海鼠塀になり、ガス灯が復活。屋根と塀壁面では漆喰が白く輝いています。小川一真1904『東京帝國大學』より。

1907～1913年頃



縁石とアプローチを整備

ガス灯外側に縁石とアプローチを整備し、排水溝の暗渠化も。左下には市電延伸で後に撤去される電柱の影が。絵葉書「東京名所第一輯 帝國大學赤門」。

1913～1917年頃



門前に停留所ができる

門前に「大學赤門前」停留所が登場。南側番所前時計付きの標柱が建ち、車道には軌道整備の切石が敷かれました。絵葉書「(東京名所) 帝國大學赤門」。

1919年頃



土砂がやや土山状に

北側番所前のガス灯がなくなり、掘り起こされた土砂がやや土山状になっています。市電停留所の標柱は写っていません。東京府1919『東京府史蹟』より。

1923年



安否確認の張り紙が...

関東大震災直後の赤門の姿です。右から2本目の足場や門柱には安否確認のための張り紙があり、漆喰部分にも伝言が書かれています。館蔵ガラス乾板。

1925年



震災後の2年は放置

震災後、学内事情から約2年間放置された赤門。大棟直下の熨斗瓦が落ち、隙間が生じています。『東京帝國大學赤門及同門衛所其他修繕工事写真帖』より。

1926年



石の円柱柵を設置

門と番所の瓦が葺き直され、塀・袖塀の土壁が塗り直されました。現存する石製円柱柵も設置されました。『震災復旧宮繕工事契約締結報告書』より。

1929年



番所前に楠の植樹

番所前に支持丸太で保護された楠の若木が見えます。番所前に現存する楠の樹齢が90年超であることが窺えます。『東京大学医学部卒業アルバム』1929年より。

1939年



「國寶赤門」の標柱あり

1931年に国宝に指定されたのを受けて設置された「國寶赤門」の木製標柱が、南側番所前に確認できます。『東京大学医学部卒業アルバム』1939年より。

1961年



標柱が「赤門」表記に

1959年10月から1年半かけた大修繕で、塀塀の海鼠塀は羽目板塀に戻り、標柱の「國寶」は朱で上塗りされました。『赤門保存修理工事記録写真集』より。

## 「赤門——溶姫御殿から東京大学へ」監修者に聞きました



総合研究博物館教授

### 西秋良宏

東海大学文学部講師などを経て、2006年より現職。先史考古学専攻。展示図録に『精神のエクスペディション』（編、1997年）、『加賀殿再訪』（編、2000年）、『遺丘と女神』（編、2008年、以上東京大学出版会）など。

※毎春、総合研究博物館は閉館になるのが通例ですが、卒業式、入学式、五月祭もある春は、新入生や父兄の皆さんが大学に来る機会が多い時期。もったいないという思いが募り、あえてこの時期（3月18日～5月28日）に企画されたのが今回の「赤門展」でした。「初めて来た人に東大のシンボルについて知ってもらうのは有意義だと思ったんです」（西秋先生）。

※教務補佐員としての調査参加でもらった給料で初めてシリア調査に行けたという思い出深い調査だったそう。「当時、三四郎池の周りから予期せぬ植栽や散策道の跡が出てきて驚いたことを覚えています」。

#### 赤門展を見逃したあなたには…

↓今回の展示物とその詳細な解説を網羅した図録『赤門 溶姫御殿から東京大学へ』（東京大学出版会／2500円＋税）がおすすめ。四「東京大学の赤門へ」では「学内広報」からの引用も掲載されています。



### 構内発掘調査の最新研究成果

実は、当初の想定は「溶姫展」でした。本郷構内の発掘調査が進み、溶姫に関する情報が蓄積されてきたということで、埋蔵文化財調査室（埋文）から提案があったのが発端です。ミーティングを重ねるうち、知名度が抜群の赤門を前面に、という話が進み、「赤門展」となりました。東大140周年というタイミングももちろん一因でした\*。

私の専門は西アジアの先史考古学です。ただ、大学院生だった1984～85年、学内初の本格的発掘となった山上会館・御殿下グラウンド工事前調査に参加しました\*。そのとき同僚だったのが今回もチームを組んだ埋文の堀内秀樹先生や成瀬晃司先生。実は、近世の発掘調査は実質的に東大構内の発掘調査が嚆矢です。文字資料が残る江戸時代は日本史学の範疇だという認識があり、考古学者による本格調査はされてこなかったんですが、不動産開発が盛んになった80年代半ばから、新しい時代も発掘調査をしようという動きが活発化しました。その流れを作ったのが東大構内発掘調査でした。

そうしたご縁と経緯があり、2000年に「加賀殿再訪」展、2011年には「弥生誌」展を私が博物館で担当しました。学内の文化財について研究者として関心を持ち続けてきたことが、今回の展示につながったと言えます。これで和ものの展示は3回目。縦書きの図録はまだ慣れませんが（笑）。

埋文の先生方から興味深い話を聞き出す作業は全部で10回ぐらいやりました。当初、標柱はリストになかったんですが、そういえば番所にあるぞという話が成瀬先生から出てきて、入れました。「国宝赤門」と聞いても最初は「？」でしたが、これをきっかけに、補修部材とか釘とか塗料とか、いろいろ出てきました。専門家同士では当たり前すぎて話題にならないようなことも、門外漢と話すと出てくるものです。埋文には陶磁器の専門家が多いので、彼らだけだと

茶碗が多くなるでしょうね（笑）。昨年9月には全399点の展示物を確定しました。

### 赤門の生命力の強さを感じます

私はこれまで大小20ほどの展示を担当しましたが、これほど知名度が高い題材を扱ったのは初めてで、間違えられないという重圧はいつも以上に感じました。案の定お客様にも詳しい人が多く、説明文を見て「右と左が逆」と指摘されたこともありました。

今回、赤門がいかに大事にされてきたかを知って感動しました。補修部材まで保管してあるとか、こんなに多く写真が残っているとか……。もともと赤門は江戸時代の優れた遺構として大事にされましたが、いまは東大の門として大切にされています。190年前に門ができ、50年間は溶姫の赤門で、140年が東大の赤門。次の展示では意味合いの変遷がテーマになると思います。今回の副題は「東京大学へ」でしたが、次はきっと「東京大学の」。東大の門としての文化財的価値を調べると面白いでしょうね。

3Dスキャンは新しい試みです。アカデミックコモンズ発掘の際に生研の野城研が埋文とともに測量をやっていたという縁があって実現しました。歴史的文化財のアーカイブ化です。たとえば、シリアのパルミラ神殿がISに破壊されましたが、事前に写真を撮っていたおかげで、コンピュータ上では復元できます。当地が平和になったら、散逸した石をデータ通りに組めば復元できる。赤門も、焼けたりしないのが一番ですが、万一の場合はこのデータが役立つでしょう。

ただ、振り返ると赤門は関東大震災でも東京大空襲でも焼けなかった。生命力の強さを感じます。「赤門展」終了後、標柱と一部の焼き物はインターメディアテックの常設展示となります。今回の展示を見逃した人は、丸の内でもその生命力の一端を感じてください。教職員たる者、学外の人から聞かれたときのために、赤門について少し答えられるようにしておくとういことと思います。

教養教育の現場から

第21回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 「環境エネルギー科学」+「湯・味・光の物理」のコラボが実現

／教養教育高度化機構シンポジウム「教養教育と自然科学」



## ●プログラム(3月14日13時～18時@21KOMCEE WESTレクチャーホール)

開会挨拶	小川桂一郎(総合文化研究科長) ①
シンポジウム趣旨説明	松尾基之(KOMEX機構長) ②
<b>第1部 環境とエネルギーの課題解決に向けて(環境エネルギー科学特別部門)</b>	
激動の時代を迎えた日本のエネルギーと人材育成	瀬川浩司(部門長) ③
基調講演「課題解決先進国日本における環境・エネルギー教育」	小宮山宏(三菱総合研究所理事長) ④
国際交渉やビジネス開発に伴って感じた環境リテラシーの必要性	小林光(総合文化研究科) ⑤
<b>第2部 身近なことから学ぶ教養としての自然科学(自然科学教育高度化部門)</b>	
部門の紹介	和田元(部門長) ⑥
授業「茶わんの湯」の紹介	鹿島勲(同部門) ⑦
味を感じる仕組み	石丸喜朗(農学生命科学研究科) ⑧
液滴の魔術: ニュートンの虹、ウィルソンの霧箱	鳥井寿夫(同部門) ⑨



シンポジウムでは環境エネルギー科学特別部門の内田聡先生が総司会を務めました。閉会後のMMホールではKOMEX各部門によるポスター展示と軽食つきの懇談会も併催されました。

今回のシンポジウムでは、「教養教育と自然科学」をお題に、学内外の6先生から、自身に取り組んでいる授業や研究の内容をベースにした報告がありました。

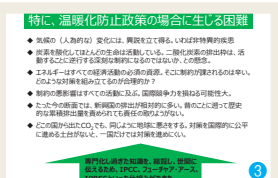
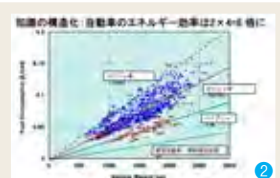
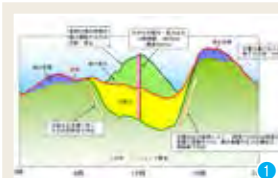
第1部では、まず環境エネルギー科学特別部門長の瀬川先生が、世界と日本のエネルギー事情を概説。エネルギーを総合的にマネジメントする技術と、環境エネルギー科学に携わる人材育成の重要性がますます増していることを強調しました。基調講演の小宮山先生は、エネルギー問題でも自動車数でも家屋件数でもキーワードは「飽和」であり、都市鉱山の

潜在力活用で日本は資源自給国になれる、と熱く語り、昔と変わらぬ小宮山節を披露しました。小林先生は、環境省で37年間行政に携わってきた立場から感じた環境リテラシーの必要性について言及。環境対策に費用を割かなかった企業が公害の賠償額負担で多大な損失を出したという実例が説得力に溢れていました。

第2部では、聴衆とのやりとりを重視した双方向型の授業形式を採用。部門長の和田先生から自然科学教育高度化部門の沿革紹介があった後、鹿島先生が寺田寅彦の名随筆にインスパイアされた授業

「茶わんの湯」を紹介(本誌1477号で詳報)。石丸先生からは、味覚受容体の基本情報や、甘味を感じられないと思われた鳥類が甘味を感知していたことを示す実験結果の紹介など、味覚の科学に関する興味深い報告がありました。鳥井先生からは、光自体に色はついていないことを看破したニュートン、霧箱の発明で放射線研究に貢献したウィルソンなどの先達を例に、光の物理についての講演がなされました。

第1部、第2部を通じて、身近なテーマを端緒に教養教育と自然科学の醍醐味が伝わってくるシンポジウムでした。



- ①太陽光発電の割合が高い九州電力の電力構成を示す瀬川先生のスライド。
- ②自動車のエネルギー効率向上の変遷を示す小宮山先生のグラフ。
- ③環境政策が進まない言い訳として使われがちな「あるある」例(小林先生)。
- ④鳥井先生の講演では、白色LED、分光シート、電池、偏光板などの特製キットが配られ、聴衆自身が分光実験を行いました。
- ⑤懇談会会場では味覚実験としてののり水コーナーが登場。
- ⑥同会場では極低温の液体窒素を使った霧箱の展示も。

## ワタシのオシゴト 第134回

RELAY COLUMN

法学政治学研究所等  
公共政策大学院係・主任 齊藤美奈

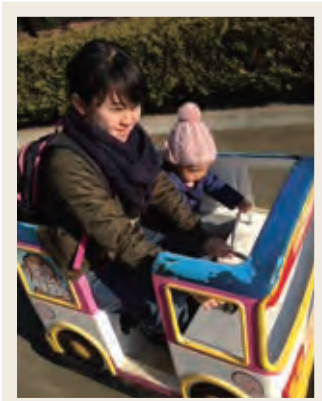
## 石の上にも、はや六年



学位記伝達式準備中。係の堀越さんと。

JSPSでの研修後に着任してから、この係での生活も(産休・育休の一年を含め)六年目となりました。着任早々は初の学務・教務系の業務、押し寄せる質問・調査・留学生に、無信心ながら「神は私に何という試練を!」と思う、石の上での修行のような日々でした。それが人に恵まれ、支えられ、気づけば「あれ? この石、意外と座れるじゃん」と感じる今日この頃。

公共政策学教育部(略してGraSPP)は、在籍生のうち留学生の占める割合が4割を越え、海外大学とのダブルディグリーを始め全学でも先駆的な取り組みを行う、cutting edgeな大学院です。前例がない!という業務も多々あり、そんなに先端を行かずとも……と思わないでもないですが、おかげで毎日が新鮮です。夏には目下建設中の新棟への引越しも控え、相変わらず話題に事欠かないGraSPP。いつまでお世話になるかわかりませんが、せいぜい精進させていただきます!



休日、家族サービスにいそむ様。

得意ワザ：合気道

自分の性格：せっかち、細々とした拘りが多い

次回執筆者のご指名：中井麻祐子さん

次回執筆者との関係：入社同期

次回執筆者の紹介：癒しの笑顔と質実剛健の合わせ技

シリーズ 第2回  
連携研究機構次世代知能科学  
研究センター  
(AIセンター) の巻話/センター長  
國吉康夫先生

## 相互的かつ動的な人工知能へ

——次世代の人工知能(AI)を研究する機構ですね。  
「キーワードを二つ掲げています。一つは「動的実世界知能」。相互作用と動的情報を基本原理とする人工知能です。出力が対象の変化を引き起こし、その結果を受けて出力を変え、さらなる変化を……という相互作用のループを目的に向けて制御したい。相互作用は身体や周囲の事物、他者などを経由しつつ影響を受けるので、その様子を見極めてうまく「乗りこなす」必要があります。身体、事物、他者の状態は常に変動し、時に想定外の事も影響して、相互作用を変化させます。それに臨機応変に対処するには、単に大量のデータから学習すればよいというものではなく、認識や判断自体が「動的」なものにならないといけません。生体の脳や認知がこれをどう実現しているのか、身体や感覚がどう相互作用を支え、他者とのやりとりがどう成立し変化するか、などの解明に基づき、革新的な材料やデバイス、機構やコンピューティングなどの技術を総合して、新たな知能の仕組みを構築する必要があります」

——もう一つのキーワード「人間の人工知能」とは?

「人間の心や倫理も理解することです。たとえば、自動運転車の前に自転車飛び出してきた、よける先にも人がいたらどうするか。正解はないが人工知能の判断は常に人間の許容範囲にないといけません。それをどう保証するか。重要かつ難解な課題です。次世代の人工知能には人の心を理解する機能が必要です」  
「人工知能の活用でどんな社会を目指すべきかも議論すべきです。一例は民主主義です。意思決定の方法といえば投票ですが、案に賛成か反対かを問う投票では1bitの情報しか扱えません。人工知能の技術を磨けば各人からもっと多くの情報が得られます。この部分は賛成だがあの部分は反対、賛成したが実はどっちでもいい、この条件が変わったら意見が反転する……。センサー情報やデータベースなどを活用して様々な意見を把握し細部まで擦り合わせられるはず。投票と違う合意形成の方法を技術的には提案できるでしょう」

——新しい民主主義の提案……わくわくします!

「まだ思考実験ですが、人工知能の使い次第で社会はよりよくなるかもしれません。その議論の材料を提供したいのです。それには文系の先生の協力が不可欠。すでに個別の先生とは話していますが、将来は部局としての参加を希望しています。進めてきた連携協議や組織整備などが一段落したので、年内に本格キックオフの催しを行うつもりです。人工知能技術はおおよそあらゆる分野で動的に相互作用できるはず。ご注目を」

# あちこちそちこち

第17回  
本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

保健体育寮 (スポーツア)  
戸田寮の巻  
へだ

戸田寮管理人  
濱野秀治

## 明治から続く東大の“海の家”



高台から戸田湾を望む。砂州の先端に戸田寮はある。

戸田寮は、伊豆半島の西側（静岡県沼津市戸田（旧戸田村））、駿河湾と戸田湾に挟まれた砂州の上にある保健体育寮です。その歴史は大変古く、明治31（1898）年に水泳部が戸田御浜に水泳場を開設したことに始まり、明治41（1908）年に松城やえさんが保有していた保養所を当時の東京帝国大学が買い取り、戸田寮が開設されました。以来、戸田寮は保健体育寮として主に運動部の合宿や授業（ゼミ）などに使用されています。夏期開寮期間中は運動部の学生（寮委員）によって運営の一部が行われており、OB・OGや地域との交流も盛んに行われています。

戸田寮の魅力は何と言ってもそのロケーションです。寮の目の前にあるビーチでの海水浴や、和船（樽こぎ）での海遊びはもちろんのこと、9月には駿河湾でのトロール船による底引き網漁が解禁となり、戸田名物のタカアシガニや、珍しい深海魚を近くの食堂で食べることができます。釣りは一年を通して楽しむことができ、春はキス、夏はアジ、秋はサバ、冬はイカなどを寮の前の海で釣ることができます。また、戸田寮周辺の遊歩道からは雄大な富士山を眺めることもできます。

戸田寮は東京大学の学生・教職員・卒業生であれば利用できます。今年の夏には長らく休止していた沼津-戸田間のフェリーが臨時で復活すると聞いています。是非とも東大の“海の家”を満喫しにいらしてください。利用方法などについては下記URLをご覧ください。



1. 戸田寮外観。現在の建物は昭和53年に竣工。2. 客室からは砂浜が見渡せる。3. 管理人は平成3年から戸田寮に務めている。4. 戸田寮からの風景（灯台と富士山）。

[www.undou-kai.com/sportia/](http://www.undou-kai.com/sportia/)

# いちょうの部屋



学内マスコット放談



今回のゲスト

メムーさん  
Mememou

東大ナビ  
UTokyo navi

東大ナビ(大学総合教育研究センター)

学内のイベント情報を集約して発信しているサイトのマスコット。身長150cm。よく芝生の上にいる。

いちょう●こんにちは。キミはもしかしてポケモン？  
メムー●いいえ。東大ナビのスタッフのメムーです。  
い●「メムー」っていうのは、目目夢？ 芽芽無？  
メ●違います。つぶらな瞳とやわらかそうな質感を表しています。mouはフランス語で「やわらかい」という意味です。この前公募で名付けてもらいました。  
い●周囲に漂う▲や■や●は何？ 新種の素粒子？  
メ●「ナビっこ」です。学内のあちこちを漂ってイベント情報を集めています。それをぼくが「ふむふむ」と受け取って、頭のアンテナから発信しています。  
い●へえ、自分の下僕がいるなんて羨ましいなあ。  
メ●下僕ではありません。ぼくの分身です。  
い●何か好物はある？ ポロック？ ポフィン？  
メ●トーストしていないふわふわの食パンです。東大ナビのスタッフがときどきくれます(→)。  
い●東大ナビの人が下僕というか飼育係のかな？  
メ●下僕でも飼育係でもなく、大切な仲間です。  
い●じゃ、苦手なものは何？ しいたげとか？  
メ●ハトです。くちばしが尖っているのが怖いんです。それに、食パンを横取りされたことがあるので……。  
い●奴ら、首の動きがキモいね。ところでキミ、びびり（「東大TV」マスコット）と似てるけど、親戚？  
メ●いいえ。でもよく近くにいます。ただ、あの子はアンテナの先が尖っていて少し怖い場合があります。  
い●ボクやミッキーさんと違って指が5本もあるね。  
メ●はい。いろんなものをつかめます。  
い●なんか、グッズやSNSも展開してるんだってね。  
メ●ぼくとナビっこの文具セット(→)を作って新入生向けキャンペーンで300人に配りました。東大ナビは、メールマガジンとTwitterのほかLINE@でも情報を配信しています。かわいいLINEスタンプも作りたいですよ。  
い●厚遇だなあ。広報課とは大違いだ……。で、今後どんな活動をしていきたいとか、あるの？  
メ●部局や本部で活動しているマスコットのみなさんとお友達になりたいです。みんなでピクニックに行つて、芝生でサンドイッチを食べられたらいいな。  
い●ハトのいない芝生が見つかることを祈るよ。



[www.todainavi.jp](http://www.todainavi.jp)

※登場したいマスコットさんがいたら広報課まで一報ください！（いちょう）



## インタープリターズ・第118回 バイブル

教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門・特任講師 **見上公一**

### 秩序の乱れから考える秩序のあり方

新しい環境で生活を始めると、今まで気にしていなかったことが急に気になったり、ほかの人が気付かないことに気付いたりすることがよくある。4月からここで働き始めた私は、今まさにそんな状況にある。

最近気になったのは歩道を走る自転車の存在だ。ある日、駒場キャンパスの近くを走る山手通りを歩いていたら、私の横を自転車が爽快に駆け抜けていった。危ないと思い、ふと周りを見ると、そこでは緑石の内側に白線が引かれ、頭上の標識で歩行者が通行する側と自転車が通行する側が区別されていた。自転車が通行するはずの部分に特に障害物などはなく、その自転車がなぜ歩行者側にはみ出していたのかと少し不快に感じたのだった。



そして、少しの間を置いて、この「不快さ」が、私に危ないと感じさせたという事実よりも、規則を守らず、そこに存在すべき秩序を乱したという事実に向けられていることに気付く。文化人類学者メアリー・ダグラスがその代表作である『汚穢と禁忌』で論じたように、「穢れ」がその場との関係で生じる相対的な感覚だということを改めて実感したのである。

では、秩序の乱れによってそこに存在すべき秩序を改めて認識するといったこのような経験は、社会のためにどう活かされるべきだろうか。もちろん、何もしないという選択肢もある。秩序の乱れが放置され、後になって何か事故が起きたならば、私が感じた「不快」がコミュニティの「不安」へと変わり、白線や標識が示唆するそこに存在すべき秩序を取り戻すために更なる術が持ち込まれるだろう。だが、なぜ自転車が歩行者側にはみ出していたのかを理解しようと努力し、新たな秩序のあり方を模索することもできるはずだ。

科学の進展や新しい技術の登場によって、これまで当たり前と思っていた社会の秩序が脅かされることがある。このところ話題となっているゲノム編集技術と生命観の問題は、そのような例の一つと言える。単に秩序が乱れることを嫌うのではなく、かといって秩序の乱れをそのまま放置するのでもなく、私たちの社会に適した新たな秩序のあり方を模索する姿勢の重要性を、これからここで担当する科学技術インタープリター養成プログラムを通じて伝えていきたいと思う。

科学技術インタープリター養成プログラム  
science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp

## 救援・ 復興支援室 より

第65回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

### ザシキワラシの日常<sup>(39)</sup>

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文: 佐藤克憲

本学教職員の方ですと、既にポータルサイトで御覧になった方がいらっしゃるかもしれませんが、震災発生の年(2011(平成23)年)の5月13日に岩手県遠野市の市役所西館内に設置され、現在私ともう1名の職員で業務を行っております「救援・復興支援室遠野分室」は、来年(2018(平成30)年)3月末をもって閉室することとなりました。遠野分室が行ってまいりました、岩手県等の三陸沿岸被災地で本学構成員が復興支援活動を行う際の拠点となる「遠野東大センター」(プレハブ施設)の提供は本年12月28日、「救援・復興支援室大槌連絡所」(大槌町中央公民館内の一室)の提供は来年2月28日をもって終了する予定です。また、車両の貸出しについても、本年12月28日をもって終了する予定です。

しかし、三陸沿岸被災地の復興は、本コラムでも時折状況をお伝えしておりますとおり南部を中心にまだまだ道半ばと言わざるを得ない状況にあり(比較的復興が進んでいる北部でも、昨年8月末の台風被害により改めて復旧・復興に取り組んでいる所もあります)、現地での支援は終了するものの、本学は今後も「東日本大震災復興支援室」(平成30年4月に「救援・復興支援室」から名称変更予定)傘下のプロジェクトへの支援や、学習支援ボランティア活動の継続実施等の形で、東日本大震災の復興支援活動に取り組む予定です。

これまで岩手県内の復興状況、本学を中心とした復興支援活動について紹介してきたこのコラムもあと5回。残りわずかではありますが、「被災地の今」を最後までしっかりお伝えしていきたいと思っております。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(上)遠野東大センター内  
(2階大部屋の一部分)。  
(下)大槌連絡所内(大槌町中央公民館内一室を借用)。

www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info\_j.html  
kyuenfukkou.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp 内線: 21750 (本部企画課)

**トピックス** 全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
4月7日	教育学研究科・教育学部	グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム	2月21日
4月11日	産学協創推進本部	東京大学産学連携協議会「アドバイザーボードミーティング」を開催	2月27日
4月11日	国際本部	IARU 学長会議開催	3月27日
4月12日	本部総務課	平成 29 年度学部入学式を挙行	4月12日
4月12日	本部総務課	平成 29 年度大学院入学式を挙行	4月12日
4月13日	広報室	世界の卒業生紹介 5 / TIME 誌が「世界の発明 50」に選んだ玉城絵美さん	3月7日
4月17日	先端科学技術研究センター	先端科学技術研究センターと熊本県及び熊本大学との間で包括的連携に関する協定を締結	4月10日
4月18日	史料編纂所	「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」を開催	4月7日
4月20日	広報室	世界の卒業生紹介 6 / 日本の登山を観光業と融合させる山田淳さん	3月7日
4月27日	広報室	世界の卒業生紹介 7 / シドニーで研究者になった「東大の琴欧州」 Petr Matous さん	3月7日
4月27日	本部学生支援課	運動会スキー部の石原さんが世界スキーオリエンテーリング選手権大会に出場！	3月5日
4月28日	教育学研究科・教育学部	教育学部附属中等教育学校 72 回生入学式	4月7日
5月9日	本部博物館事業課	諏訪元（教授）総合研究博物館長が米国科学アカデミーの外国人会員に就任	4月29日
5月9日	国際本部	第 2 回東京大学 - 清華大学 戦略的パートナーシップ合同シンポジウム @ 清華大学 "Joint Symposium on Multidiscipline"	4月13日
5月10日	国際本部	東京大学ーブリティッシュ・コロニア大学ーマックスプランク協会による 3 者全学協定に調印	4月25日
5月11日	広報室	世界の卒業生紹介 8 / 東南アジア仕込みの AI を日本で広める平野未来さん	3月7日



## CLOSE UP 産学連携協議会「アドバイザーボードミーティング」を開催 (産学協創推進本部)



アドバイザーボードミーティングの様子。

本学の知と産業界の知を融合し、新しい価値を創出するためのプラットフォームである東京大学産学連携協議会のアドバイザーボードミーティング (ABM) を、2月27日、安田講堂大会議室にて開催しました。本学からは、五神真総長、各理事及び渡部俊也産学協創推進本部長ほかが出席し、産業界からは、KDDI取締役会長小野寺正氏、三菱ケミカルホールディングス取締役会長 小林喜光氏、日立製作所 取締役会長兼代表執行役 中西宏明氏、リクルートホールディングス代表取締役社長兼CEO 峰岸真澄氏を迎え、活発な意見交換を行いました。

五神総長は、学理が産業界、社会と連携して経済の変革を作っていく必要がある、変革を駆動するために、社会に出た人材のネットワークを形成して連携し、ベンチャーマインドを作っていくことが必要であると述べました。続いて渡部産学協創推進本部長が、組織間連携を目指

すための各種取組、ベンチャー振興の施策、単独特許の強化方策及び組織間連携のための知財契約の刷新につき報告を行い、産学協創推進本部各務茂夫イノベーション推進部長が、東大と企業がタッグを組んで社会実装を伴うイノベーションプロジェクトに関する報告をしました。

産業界からは、「知の集約、社会科学との連携、サービスとの組み合わせ、ベンチャーとの連携などを含む多面的連携が重要」「ベンチャーへの取り組みは仕組みづくりが重要で、日本らしい取り組みが求められ、学生への起業家教育は特に重要」「グローバル市場での新興企業の成長速度がますます早まっている中で、イノベーション活動は世界での戦いを前提とすべき」などの意見が出されました。

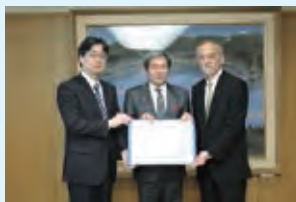
最後に、保立和夫理事が、大学と企業との連携が大事で、この活動がますます伸びていくよう力添えを頂きたい旨、挨拶しました。

## 春の紫綬褒章受章 (広報室)

飯野正光名誉教授 (医学系研究科・医学部)、山本一彦元教授 (医学系研究科・医学部)、中里 実教授 (法学政治学研究科・法学部)、中島映至名誉教授 (大気海洋研究所) の4先生が、

本年春の紫綬褒章を受章しました。おめでとうございます。ゆかりの深い先生方が執筆した紹介記事については、全学ウェブサイト「お知らせ」のページからご覧ください。

 CLOSE UP



締結後の記念撮影。左から先端研神崎所長、熊本県蒲島知事、熊本大学原田学長。

**先端研が熊本県・熊本大学と連携協定を締結** (先端科学技術研究センター)

4月10日、先端科学技術研究センター(先端研)と熊本県及び熊本大学との間で、平成28年熊本地震からの創造的復興を達成し、復旧・復興を熊本の更なる発展につなげるとともに、「災害に強く誇れる資産を次代につなぎ夢あふれる新たな熊本の創造」に資することを目的として、包括連携の協定の締結式がとり行われました。

熊本県庁にて行われた締結式では熊本県・蒲島郁夫知事と熊本大学・原田信志学長、先端科学技術研究センター・神崎亮平所長が署名捺印を交わしました。

この連携では、高齢者の就労支援、障がい者

の就労支援、地元企業のイノベーション支援、震災アーカイブなどの分野で、研究交流、産学官連携、人材育成等を進めていくことを想定しています。

先端研ではこれまで、東日本大震災以後「震災アーカイブプロジェクト」において、分野横断的に震災復興支援のあり方について議論を重ね、また研究室単位で様々な復興支援を行ってきました。この締結を契機として、先端研は持ち味である先端研究をもとに、熊本県・熊本大学両者と密に連携・協力しながら、熊本の復興支援のために様々な取り組みをさらに進めていく予定です。

 CLOSE UP



恒吉僚子学校長の祝辞の様子。

**中野の附属中等教育学校で入学式を挙行** (教育学研究科・教育学部)

4月7日、中野キャンパスにある教育学部附属中等教育学校で72回生(120名、男子60名、女子60名)の入学式が行われました。恒吉僚子学校長(教育学研究科・教育学部教授)は祝辞で、自身のプリンストン大学留学時の話に触れました。「私にできること、すべきことがここにはあるのかもしれない」という自身にとって打ち込

むことがみつかったことを新入生に伝えました。そして、この附属での6年間に、皆がそれぞれの「パッション」の泉への道筋が見つかることを心から願っていると結びました。また、教育学研究科長・教育学部長の小玉重夫教授は、「知的好奇心」を大切にしてほしいと新入生に対して祝辞を述べました。

 CLOSE UP



諏訪 元(教授) 総合研究博物館長

**諏訪元博物館長がNASの外国人会員に就任** (本部博物館事業課)

米国科学アカデミー(National Academy of Sciences, NAS)の第154回年次大会(4月29日から5月2日に開催)にて、諏訪元(教授)総合研究博物館長が外国人会員に就任しました。今回は、2016年選出の新規会員84名、外国人会員21名の就任式が執り行われ、諏訪館長は、「中新世から鮮・更新世にわたるフィールド調査による諸発見と人類化石の形態と数量解析により、人類の起源について新たな知見をもたらした」と紹介されています。

NASは、米国の科学諮問機関として1863年に設立された非営利の民間学術団体で、顕著な業績をあげた科学者を毎年選出しており、会員に選ばれることは米国の科学者・技術者にとって最も名誉なことの一つと考えられています。現在は会員2250人と外国人会員450名程度からなり、そのうちの200人程度がノーベル賞を受賞しています。現在、日本在住の日本人会員は30名で、人類学の分野では初めての日本人会員の就任となりました。

 CLOSE UP



和やかな雰囲気にもまれた締結式。



懐徳館では昼食会が行われました。

**Max Planck協会・UBCとの全学協定を締結** (国際本部)

4月25日、東京大学とブリティッシュ・コロンビア大学(カナダ)およびマックスプランク協会(ドイツ)との間で、全学協定の締結式が本学にてとり行なわれました。

締結式では、ブリティッシュ・コロンビア大学学長、マックスプランク協会会長、本学五神総長が一同に会し、署名と今後の連携について様々な議論が交わされました。

この協定は、物質科学分野で世界をリードするこの3機関が共同でグローバル研究拠点(Max Planck-UBC-UTokyo Centre for Quantum Materials)を形成することにより、量子物質研究の加速・発展に寄与することを目的としてい

ます。本学からは、理学系研究科、工学系研究科、物性研究所がこの枠組みに参加しています。

この枠組みでは、量子物質研究分野の将来を担う若手グローバル人材育成も連携の大きな柱となっています。

3機関の緊密な連携により、若手研究者、大学院生の相互訪問、学部生の研究インターンシップ推進が計画されています。中でも、学部生の研究インターンシップは極めてユニークなプログラムであり、若い学生達に世界トップレベルの研究の最前線を肌で感じてもらう機会を提供していく予定です。

<https://www.fkf.mpg.de/mpg-ubc>



## 中国での雑感

6年前に初めて北京を訪れて以来、ここ数年、年に5～6回は、中国を訪問する機会が多い。現にいまもこうして中国を旅して執筆しているところであるが、他にも、上海、広州、杭州、武漢、昆明、瀋陽など、今では中国各地に知り合いも増え、筆者の研究室にも中国からの少なからずの留学生が勉学に励んでいる。他の自然科学の分野でもそうであろうが、筆者の天然物化学、合成生物学の分野では、ここ数年、中国の台頭は目覚ましいものがあり、今では質、量ともに、既に我が国を凌駕しているといっても過言ではない。潤沢な研究費をもとに、最新の研究機器を揃え、若手の台頭にも目を見張るものがある。十倍の人口ゆえの裾野の広さもあるが、トップクラスは、もはや欧米や日本に留学したところで、自国の方が遙かに恵まれた環境にあることを良く知っている。今度は我々が中国に渡って学ぶ側になるのは、もはや時間の問題である。

筆者は学生時代、モルヒネやペニシリンなど、薬用天然物に魅せられ、薬学部に進学し

て以来30余年。生物がこうした物質を生産するのは何故か？ どのようにしてあの複雑な構造を作り上げるのか？ 生物の巧妙なもののづくりの仕組みを解き明かし、さらに我々にとって都合の良いように利用、改変できれば、と研究に取り組んでいる。この分野の研究は、一昨年の大村智博士のノーベル賞受賞にも象徴されるように、日本の研究者が世界をリードしてきており、天然物からの医薬品の開発など、依然として大きな期待がある。また、このような生物模倣技術は、石油化学に依存した従来の物質生産技術よりも、クリーンかつ経済的な技術となることから、医薬品のみならず、エネルギー、新規素材の生産技術の革新にも直結する。資源小国の日本が、この中国や欧米に遅れをとることのないよう、国を挙げて取り組むべき時に来ている。

阿部郁朗  
(薬学系研究科)